

まなび CAN 講演会「現役検事から見た刑事司法」を開催しました！

6月1日（日）、高松市生涯学習センターまなび CAN で実施された放送大学香川学習センター主催の講演会において、当庁上野正晴次席検事が「現役検事から見た刑事司法」と題して講演を行いました。



講演は、まず、検察庁の組織、三権分立の中での検察、法曹三者の役割や、裁判官、検察官そして弁護士がお互いをチェックしてけん制し、バランスを取っている

ことの説明で始まり、自身の検察官人生について、今までの経歴、仕事の幅の広さ、検事を目指した理由などについてざっくりと紹介したり、刑事事件の捜査について、客観証拠と供述証拠を集める上での注意点を、経験した事件などを紹介しながら説明したりしました。

↓検察官バッジ

また、検察官バッジの説明では、デザインのもととなっている



「秋霜烈日」は「秋におりる霜と夏の厳しい日差し」を表し、検

事の仕事の厳格さを表しているけれど、後輩検事たちには、真ん中にある赤い太陽のように、お日様のような思いやりを持って仕事をするのが大事だと話しているというエピソードも紹介しました。

最後に、検察官が逮捕、勾留、搜索差押といった強い権限を使ってまで捜査を

するのは、真面目に生きている人たちがいわれのない苦しみに遭わないで暮らせるようにしたいからで、いつも被害者の味方であるようにと思って仕事をしていることを「被害者とともに泣く」という言葉とともに、力強く説明しました。

講演会後は、参加していた学生さんを中心に交流し、襟元に付けていた検察官バッジを見せ、直接質問に答えるなどして、楽しく話をする姿もありました。

今回のイベントでは、参加募集60名のところ、小学生からご高齢の方まで幅広い年齢層の120名を超える参加者があり、最終的には会場の椅子が足りなくなり、立ち見の方が出るなど大盛況となりました。



ご来場いただいた皆様、お忙しいところお越しいただき、誠にありがとうございました。

最後になりましたが、放送大学香川学習センター及びまなびCANの関係者の皆様、今回は講演の機会をいただきまして、誠にありがとうございました。

↓令和7年6月2日付 読売新聞にも掲載されました。

	<p>検察官の仕事について語る 上野次席検事（高松市で）</p>
<h2>検察官のやりがい熱く</h2>	<h3>上野・高検次席検事講演</h3>
<p>高松高検の上野正晴次席検事が1日、高松市片原町の市生涯学習センターで講演し、検察官の仕事内容ややりがいを紹介した。</p>	<p>放送大香川学習センターが主催し、約120人が参加した。上野次席検事は講演で、立法、行政、司法の三権分立や、法曹三者（裁判官、検察官、弁護士）の役割について説明。「互いをチェックしてバランスを取り合い、暴走を防いでいる」と述べた。</p>
<p>検事としての自身の経験も話し、「検察官は、捜査のために与えられた権限を使って、まじめに生きる人たちがいわれなく苦しめられることを防ぎ、被害者とともに泣く仕事」と力を込めた。</p>	<p>香川大法学部1年板坂未羽さん（18）は「国民の権利が不当に奪われないように検察官が頑張っているのわかって、法曹の仕事への憧れが強くなった」と話していた。</p> <p>上野次席検事は徳島県出身で、1996年に任官。京都地検次席検事や高知地検検事正などを歴任し、昨年7月に高松高検次席検事に就いた。</p>